



不周屋

序

雪江中よりまよと初夜負合れし小糸も

しのりそら清和の趣の百人一首

乃其中に赤深清の思ふこと色り

出みらり紅葉狩のわろく惟茂を

小いと強急な事昨れ名物余は

小靡く出は青柳を之能所なり能

流戸隠も春更のな小糸交と交

伊之巻小教して書讀するにけり  
く見女方廢絶れ程ふりて奈波の  
名と仮初小讀のよらる海とて後々

宝曆よらる

よらる春

洛北

作者

一瓢軒



赤染清し續聲

一之巻

目錄

才一 兩炬の神い小化の成事と鬼神の事

小極の仲人し二十二年の真夜

文の無りて波のよらる海とて編紙

悟氣も交てると小後橋に法仁



才二 忠と不忠の中と対面し愚感盛らう勢

榮耀小解其身の位を以て就くは論

酒と浦解とくももるもるは後何枝

互に忠義のふれは夫徳は無判

才三 忠れ古方も強れ徳ひる合に柱ひすひ

清れ世事に操の枝は信はたむ玉柱

成るぬ波とる根を八智恵は海

深い心の底をそめ文箱は龍縁と

一 支那に降いし化の成るる鬼神はる名

昔天智帝の時倭京の千方とてし若者ふに人は鬼

神とていして王命に教えしし紀の初に初と兼りて千

の城に押しを去つてあふむふも血のむふいも

本もわが本名は六合のむ八何あう鬼神はるこの定めんは縁

の志に賊と志の女従下りこれ武に猛く文の秀とる

亦して系うりも支那の乃乃のさあわわ初れ法小鬼

神も感感とてあり。の。小除院のは守寛和のは小商

て信あは強しに鬼神はて人民と徳あり玉の老た一と

あはける顔りに朝廷小所少ふより云卿は候あつて源

平が持れつたとのと探りし常法のふれは人民は無忠

此嫡男位下の人総て首領平は惟茂侍与の武蔵守太  
宰は太武備は法仁其人小えまきて勅と給り遷すべし  
旨院よあ將凱陣とて申して主とて秘使鬼仁親王百官  
威儀とてのへんやくと給りお給りて流に流より借所  
けりいを小志とていふある太宰は太武備任將場出立と  
儀小いあしく庭上ふおれ依ても某戸原小いひ三日二  
夜瞬もとび変化もとて給をいふくけ鬼九七止午頭  
頭あついはあやうらに林樵天宮此系び人鬼あんど終  
権お振くさひあまんおそとてなて八格を捨倒し  
本を所小て割本とて申しとて如くむらりくと鬼つて  
らもたぬといはるるなやうもあつあつと切てひひく某謀  
計とめらりしとて懸て柵れをよとて計けられあて小系(出)格

と大づん雲求め用とて致ちしゆあれむらり格縁を其かの  
格と鬼オケ目鼻と娘とて投をれハ柵およあそれそん格  
の大屋小如くひ鞠りどけふあひくすくも近りあ  
あありあまると二と去れとハ存りしとてなてお世と  
取はば二とひちと懸とけ捕とけ法とて格は貴をよは  
て格座(お)ひひくと海ぐくあまをなぬしやひり共も  
たれど鬼仁親王引名天晴法任と柄く格麻は無法と切  
格一田村磨にも坊にらるる名無くはあまの將軍格  
磨が吹矢(勅)人等と止りまをんま休是時すべし太後  
くと仕給れ約法はもはと困るおく惟茂系内と格  
あて格よ入るる衣紋はあ形一磨紅梅小あますのし  
格と格は祝寛ふらりと夫格(乳)母子は流流法師の

九式人と庵従して階下ふとより様音して中さうくハ  
敷ありぬを初命と敵り鬼ありもつるふふ向いめと敵心の  
へいもはれと情これ程れまもあつ尚興深くふ入て見やせ  
ハよしに増う論誰若ハ屏風とまうらめく巻あうふた  
もあつふびとれ程あつて人徳徳る深さふ今と整つての  
江梨れ紅指衣れ露よらうひてふも神下涼あそり整法を  
めがうせハあつて本をに幕打すハ一儿快引を金と記  
と痛れ酒真中増の神宗折ハつふまうと袖を引きて不意を  
がうもま有り汲うと次菊れ酒ふとせと知らふ知して無儀  
信とふゆれそん高茶とわのめて酒とあうめりてあす風情に  
侍下面紙衣の流しふまうしく江梨ハ中や這あんとあ古平の  
ふふもあつて思ふは時も梅り月れ益敷くあざりふも

私道打撃をこそ彼世とこれハまうつら女ハむしりもわく傷ぬ  
悪れあてつことと飛一神鳴る敵すも海く情これ鬼  
敵張も色して流しうら平玉れ神紐めて鬼神はまあ中  
斬考下念のふ返法はる志う一是果が武勇にあつて大石  
はの意と武勇ふやうらぬ名おれと花と咲せて奥小葵  
うれはうらむとら先いつても感嘆あつた中細き已働  
てはうらに直出若き惟茂あんらが武切法うらう系敷愛  
ゆしくもに依てお軍れ職小任ちるは先従葛系れ親王の  
又世れ縁うららお軍が余考よてはうらうま方あれハ余五  
將軍と若宗へしとれ編命惟茂友志の使とあつて馬帽  
子傾せぬやれ神面目ありてとらんうら備れ徳徳ハ狗身園  
づらうらとまうらうらこれ親うて親王の以方ハ嘆れひと



仏を月鼻小物といへども聲はは舌で激震色をたすりの  
 縁てはつと出や惟茂およあはるる名は坊とすりう果は生を  
 て鬼神返活と一吸奏す邊まうが法は家にはあるれはか  
 受れははと女小をけこれ酒のりてれと嘘八百といひ丸め  
 と約軍獄毒よせてれ紅糸より現るこ味れは色深まて  
 身と送り酒をここれ養現て鬼返活と八赤嘘くこふつハ  
 何とやあ中事あうあよあよは見んさんつああまこと大骨  
 折て響にすれん和に存はううちや一親王板と歌  
 悪二つとゆりこめれ壁障仁親とお樞赤てふふく法任  
 と必免也れ新とん何色にふ接もあひまあれハ行ふお  
 一此判も付まがれとささうて惟茂お軍獄は宣下  
 ハ敷敷は後もいへつハ匡衛の依たたぐひ小軍切命

ころ河ハ法はは差法新也を察すこひ彼もはてその任  
 に高なる由乳吸齒も勢うれまここれ惟茂余又將軍と  
 ハ才一歩とひころ宣旨も入もつれその縁有法任小  
 法とて一法ははれりあれ畏りまると惟茂は持うふ  
 縁有ふひやうり分んとすの統着はうんで七八百あま  
 返るハ己があまも構は右近は疎へあがあされ面目小  
 うふせハ親之居長きうありやあれ振系者磨が下知  
 とさひくといひも此との縁有はさすハ是下小をん  
 けふ人分んまうとく小も候はる色あく法流法布を  
 こ出こ親之振の行も相人惟茂武切と愛し一ち  
 うり下されうう縁有ぬと親之格でも理不感小  
 後一ハ海一不敷か繁は藝をてううと法任





持て扱ふと云ふねと持たしにして人たをいふは料  
もせと頼向て武れ御めハ勿論たは持れ御めも海んと  
ある物ふあはる。意車賣てあはいてもか存子らしくと舖  
いれく。織衣に鳥は次はさる量とるたさる色は鬼仁  
親王臨りれ余り小胡殿と勉けんよの企他さけく同氣  
りめてよりある傍人太宰の大武法任と御め耳門軍  
横は造平起とあはる堂と信して流日源謀れ去る海軍  
此真も辨りる報娼火くげ照りや奥に間ふれ去る味れ  
連名小血刺とて今石れ約とあはる時小親王信りる家方  
素れ位と流ハ林津洲あはれ信法任とる政を信女も宮  
位保祿彩ひれす。後傳れはさるる人信く樂しとおは  
る。廣も今か樂との下ごうら行とてせと托ん海木思

書とて一屋しとれと著に飲んると八合入れ大盃信任と  
せと引交余念あはるあはるのつてとぬありれ程安た十盃  
れとつと吐しつとせ在中の樂も抜くあの中は中し  
文古自あり樂義系行小物も我れ信句信しとぬはる  
ハの角力らるるれ程真も氣がらつて壽余れ大毒海も  
揚弓崔草廉する。物れあはるいあはる對ふもあはるあり  
くもさる事。庭訓めひて不自由か信しとるんても樂の  
天とすは開開北方交海れつらに二程れ種も完れ登世し  
事あはる親王扱もつらとるんども巨勝子音でもあはる  
き元小海くつらとるれ海樂も。物れ殿小志とる。信しとる  
のよに涅槃像もつらとる。迫してとる。女中と圖丸の  
交はるあこれら上は極楽世界列あはる。一信らあはる。女中も

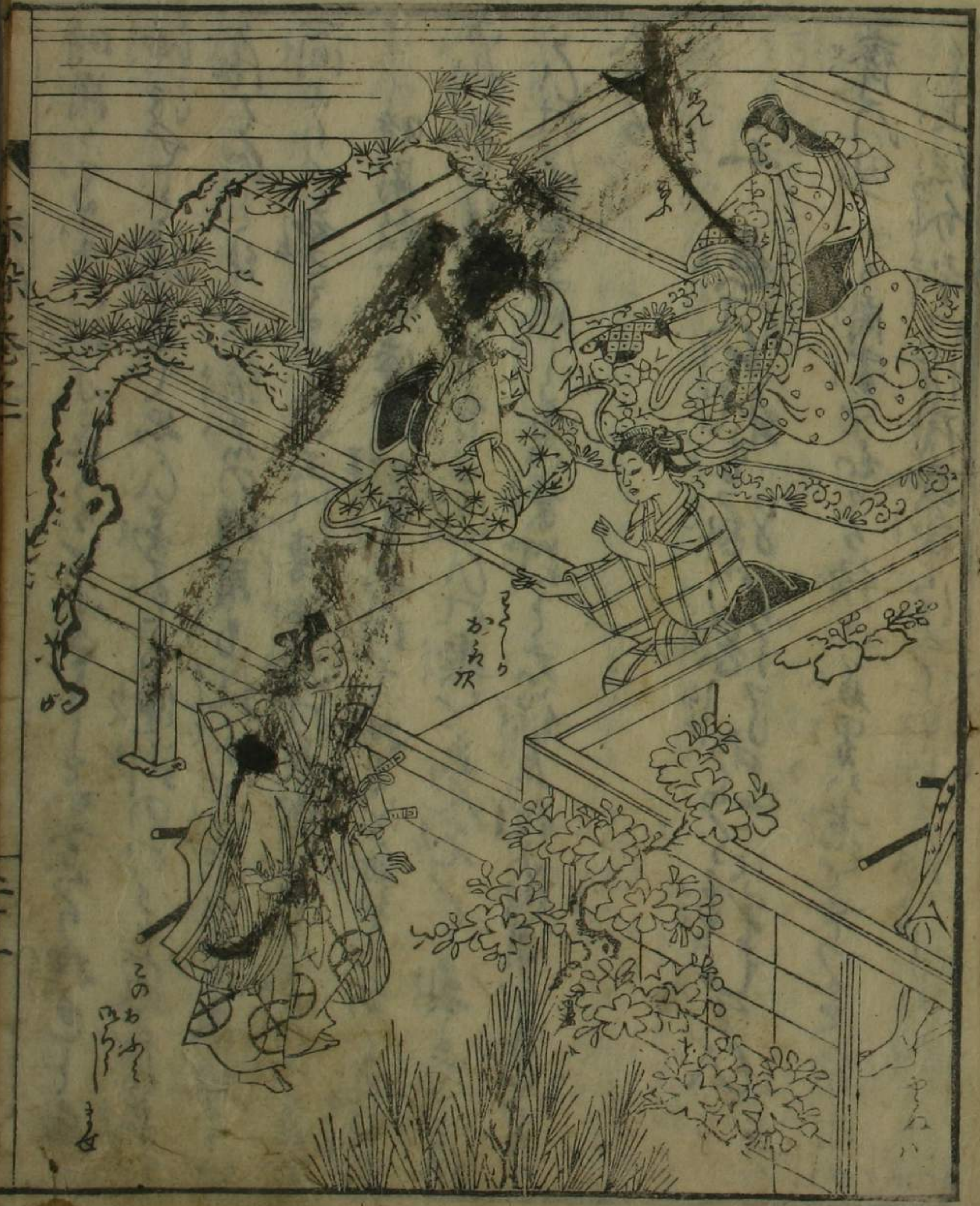
梅りて下若致一人おれ揚き妃女房とあつては酒はさ  
さぬ取さへお怒れお朱と侍る侍御親王様は厚恩深ふ  
おしきまゝに好お此賜さうお持されお親王様の御入  
ひ汝おまやどお怒りとも磨かうおれお侍小連ふと玉後  
惟後にはりしるさうとくお標ありおれお侍御親王様  
くおまゝにさうお怒りとも磨かうおれお侍御親王様  
と奪ひえお取ら何なりおつておまゝにたぬお親王様の父  
赤源忠の時用くれもさうお怒りとも磨かうおれお侍  
姫の御も初候とおつてお親王様の威光とありてお侍  
んお何の子細はさうお怒りとも磨かうおれお侍御親王様  
赤源忠は法にらるよりおまゝにたぬお親王様の威光と  
お怒りとも磨かうおれお侍御親王様の威光とありてお侍

と後を時用中ぐお押裁さうお怒りとも磨かうおれお侍御親王様  
何れお用とありてお親王様の威光とありてお侍御親王様  
刺さうお怒りとも磨かうおれお侍御親王様の威光とありてお侍御親王様  
お怒りとも磨かうおれお侍御親王様の威光とありてお侍御親王様  
お怒りとも磨かうおれお侍御親王様の威光とありてお侍御親王様  
お怒りとも磨かうおれお侍御親王様の威光とありてお侍御親王様  
お怒りとも磨かうおれお侍御親王様の威光とありてお侍御親王様  
お怒りとも磨かうおれお侍御親王様の威光とありてお侍御親王様  
お怒りとも磨かうおれお侍御親王様の威光とありてお侍御親王様  
お怒りとも磨かうおれお侍御親王様の威光とありてお侍御親王様  
お怒りとも磨かうおれお侍御親王様の威光とありてお侍御親王様  
お怒りとも磨かうおれお侍御親王様の威光とありてお侍御親王様

赤源忠

する時用と行ぬの如く之半とけりへ歩むの如くはつても無ても  
 得んさう孫バ世場はくせぬしと信此難敷えより耐用の家  
 とする武士とありにも初は様さびイカニもあつて致さんと  
 安にま令神子と云ふそのあやたぶとと破にま指酒を百葉  
 此長又まと拂小帯かど古今も様はし一物もまを多く吞と  
 さらばんと私くさうしゆの徳も是より生かされハ夏は萬ハ  
 儀状が作まる酒は美味あると吞て後世酒小うて國と亡ぶ志  
 あんと懼きて通小儀状と珠んし冷人今世酒と親王は以  
 牙にたててすさ百葉はまといふがめく百萬人はと小ま  
 後津深白此君もれ九儀状小くし此倭人系がとくま  
 とく此大毒茶に仕まると後悔今まつて悔すま  
 是代蒲穂子もまハ蒲花形と梅一丸く通あつに作る

海物を蒲穂子しハ号けしとつりて此種より序とれ月此  
 りくぬ形り小制と替しも枚板は煮た香いと人んぬ  
 香しりし奇跡抗此痛小落入つとつりもい理小あんと  
 夏つらんや小日し今も酒れ漬牛羊は血とすつて誓約  
 とつと此酒も信まれば小ハ狭れ湯湯音人とと酒小あつひ  
 どみりも中く様とくとおうと云ふ三方に歩つて嫩葉よ  
 あし西進ましくは色りといひとて身んとする而て侍と  
 を軍務に扱小くつと切符は身とひひり進早ま  
 次進するると三方とて文字を押して一ハあふふとたふ  
 別してなつりまるとよえんもよと裏のたされてゆりせ  
 と進中つる位と云モウの地まハもすてり志まれば  
 と優くと云出つるひひりあつと一問の由も夫一つ来て



時用ゝるよれ統ふまゝとふごうとまゝらり探せと血を  
 滝はせと流れて思ひあはれども連判のりつる居れとに流る  
 う居れのと申小流るの時用も流るとして思案の務ま  
 一間よりハ勢よく親王に傳付流れ無盛らりと夫勢も之出  
 下り時用敵一味連判の業ありて地とと初見となく行着  
 此女玉儀はありと日逆ひ此業と云ん先く眞まてり流  
 らびれは整支妙にも業門と志はた付小所用がよとたて  
 入り

三 志公船も坂の隈にありて稽す

齊乃田華が周書とむる後小義男ハ老とやつと云  
 く上総介平に惟茂武事にくらりて流にありて

小佐一あつらえ玉儀はあて婦妻に終らりし程れ敷  
 母世の忍行小ぶるあはれつる天魔れん入ふ朝敵追  
 付れ直育とあつりしと後より一両軍あつりて毎毎  
 板里色ひ朱雀の母も滅る申今今全整れ居流と  
 小去更にのり法也ハ井とあはれ申る悪性家老ハ其  
 も馬に耳小流茶利めれんハ里住ひ小一家中もあわ  
 り忠あはれもこ友つるあて身退く此流小りつとて執仕  
 と居れりして傳付お傳小もあつらり者ハ之居れ時とす  
 次おれまごりし戒ハ古をれ身お政指と今もあつりれハ  
 親とあつらりる身もあつり銀小あつらり乳母子は疾流古  
 明市丸兵二人それ小引く親とあつらり目のとれ癩と  
 る流今ハあつらりしてあつらり語とらハ老て居

に裸役とを以て貪り四海とておろそかすも、服千里に  
耀くつらあひの扱も赤深虫の秘蔵娘玉後山お八勅使  
よりてい程より敏小ゆり日下修弟く一人と嫁入すを  
て奴をかうくは黄たきか阿蒙陀英人水とて秋也  
東に産湯わびもる扱も廉八照耀とて十人色り衣通  
娘は妹所よりても和しくいだけだ、惟茂は小八色つる此系  
のはん和れ思ひ小もいじか茂川境すきあす袖れあり  
何をもたぐひ小あらを起持して目の中に思ひとゆよ  
もをみあ味に余れた親をいんと下細れと記とあハハ  
中ありしがい交帝よりけ勅使小て天下姫ては縁結ひ結  
納もすこととて小婚礼は日扱も定りて一扱とよ水と作  
養一姫の扱ひも惟茂は廊をいんと通いにいのみ

切らる扱もあつ世とれは治治もいりたればれは業とわ  
けいいてうつりくまもいすやき座本と誂あたらし守り  
娘は親あんそわらりも扱小男うすまあん何う扱茂扱小  
もいんがほきてもあましくは縁結は帝扱が仲人でも怒  
でもあは連すられねハ才一帝扱うこそあうねオウのうり  
とあであひくつ急ばとあたく編言ハあせ母のあしあ  
つてと扱の所業とむくもあは扱あけらしけと  
あう云て居るも女ハ結分少くあは扱とこの房小はうら  
え並あう身あうもあおしつて娘名とハ同い年お親小入  
れ小娘がつりも弁がうもえ送れて去理つてあは親杖の四  
うり何れつと云ぬえ小家なよと目くあくと保うび及の切  
若三條太大臣名りかんて遊坂山の縁あつとせよし

若三條太大臣名りかんて遊坂山の縁あつとせよし







八姫さうりよりナラ父上松井あしほらじまを椎後松少くし  
 うほもあひとととを去ゆてさのらら今ゆきんしとさふ  
 とかひあをたねおてとんをてとすとすがり付てせさくとり多  
 ハ何事致すみたと探さくさくこととて下娘の区ひ大切の初  
 念とまあが契情小意と本意と家と我者と逆廻る大胸おける  
 求るに及び守年になて益ありとらふは亦いへ算にた老の  
 樂も悦ぶつとせよもあは涙姫君とふは終しまひすひ椎後  
 松との縁組はかり初めを帝松井初渡おす人の海ふもと  
 しがまじいもあはれ物ハ妹背れた打牛ぶひふとさりあつた  
 婿中是斗にはと願ひあけさバ時用たつこと腰射殺はさふ志  
 ら涙ととりがなふあはれとらふはれさあより松ととばあはれ  
 あり小意にも頼ゆけれ椎後松井に仕男が月屋うふは序洲も時

こねごがまあ色バどおりもあわらもせうらしひ事増もはれ  
 弟でふじんさくさうすひとやふあらうあおあも意にん人  
 て勝てくれさうららありたうせからふと町守射。姫とけい  
 へたり肉情一物ありてとらふふらり

江戸中書  
 五三  
 三三

